高等部

2025 年度　高等部遠足報告

金井知子

本章は 2025 年度高等部遠足記録（図書館資料室に保管）と『学園新聞』第 752 号の高等部遠足に関する記事の内容を再構成した。

1. 概要と方針

2025 年度、高等部は遠足の目的地を尾瀬と決定し、3 月末より準備を行った。共学化以前には、女子部男子部共に長きにわたり、尾瀬への遠足の経験があったが、共学化 2 年目にして初めての尾瀬行きの計画であり、体力差のある約 300 名でどのようなコースが適当であるか吟味するところから始まった。生徒全員をA, Bの 2 チームに分け、Aは 6 月 30 日～7 月 2 日、Bは 7 月 10 日～12 日の 2 つの日程とし、各回共に散策コースと登山コースでの実施を計画した。

3 日間の行程の計画は以下の通りである。

〔1 日目〕

自由学園より大型バスで尾瀬御池を経由し沼山峠へ。沼山峠から全員で大江湿原を歩き、長蔵小屋へ。長蔵小屋泊。

〔2 日目〕

・散策コース

長蔵小屋から尾瀬沼を一周する木道を散策。

・登山コース

長英新道から、燧ケ岳・俎嵓（まないたぐら）（2363m）に登山。同ルートを下山する。

全員で長蔵小屋泊

〔3 日目〕

長蔵小屋から大江湿原を歩き、沼山峠を経由し尾瀬御池へ戻る。尾瀬御池より大型バスで自由学園へ帰校。

登山を主とする遠足では何よりも安全な実施のために入念な準備と組織が求められる。一方で実際的な準備にばかりに集中すると、自由学園における遠足の目的を見失ってしまう。遠足の目的とその方法について教職員はもちろんのこと、リーダーをはじめとする生徒一人ひとりが深く捉え実行することが肝要である。高等部3年では 4 月から懇談を重ね、これまでの 5 年間、各人の遠足の経験から遠足の目的と成果はなんであったかを話しあうところから始めた。そのなかで、遠足が「学年を超えて他者との関係性が真に深まるきっかけとなっている」といったことが確認され、高 3 は「結ぶ」という 25 年度高等部遠足のスローガンを決定した。この「結ぶ」には他者との関係を結ぶ、靴紐をしっかり結ぶことから安全に対する自覚を高める、自然と人の関係を結ぶ学び、といった様々な意味が込められている。

2. 組織と体制およびコースについて

24 年度に続き、遠足は体育実習の必修単位内の8単位分を割り当て、原則として全員参加という位置づけで行った。また各自で登山コース、散策コースを選択した。また、病気や怪我などの理由で両コースに参加が困難であった約 10 名は遠足期間中に1日登校し、プログラムを行った。

登山コースは

A日程は散策コース　114 名　　登山コース　28名

B 日程は散策コース　119 名　　登山コース　26名

遠足の担当教員は金井知子（登山）・高松功太郎（散策）が務めた。さらに、各日程のリーダー、装備、宿泊、交通、自然（事前学習）、救護、食　記録の係、を高 3 が務めた。また登山コースは 5 ブロック、散策コースは 2 ブロックの小チーム（1 ブロックは約 20 名で構成される）に分け、各ブロック長も高3が務めた。ブロック内に 4～6 名の異学年で構成される小班をつくり、体調や装備の確認など互いに助け合うことを目指した。

外部サポーターとして山岳ガイド平田謙一氏、山岳ドクターの千島康稔氏、鈴木麻里子看護師、波間舞看護師にご同行いただいた。

3. 準備期間について

4 月に高 3 で各係を決め、「結ぶ」のスローガンを高等部全

員に発表後、具体的な準備を行った。例年通り、足慣らしを実施。5 月 30 日を予定していたが、大雨のため延期し 6 月 6 日に全員で行った。登山コースは埼玉県飯能市の伊豆ヶ岳(851m)に登った。散策コースは飯能駅から武蔵野自然歩道等を経由し、巾着田までの約 8 キロの道のりを歩いた。散策コースにとっての適当な足慣らしのルート開拓が昨年度からの課題であった。初めて選んだが、装備、本遠足での散策に向けてちょうどよい内容であった。

足慣らし実施後の高3の振り返りでは、「班やブロック内での交流が十分でない」、「よそよそしさが感じられる関係性が各所にあり、このまま危険を伴う遠足に出かけるのは不安」、「結ぶというスローガンをもっと意識できるとよい」といった意見があがり、改善に向け日常生活の見直しが図られた。具体的には、毎日の昼食のテーブルを遠足の班ごとに囲み、さらに自治区域の組み分けもできる限り同じメンバーで行うよう工夫した。毎日顔を合わせ、親しみをもち打ち解けた関係になることで、遠足の場で互いが遠慮せずに関われることを目指した。

また 6 月 10 日から 6 月 12 日の日程で、例年通り下検分を実施した。A, B両日程のリーダー、宿泊、自然の係 8 名と教員 4 名が担当し、登山散策コースを実踏した。

4.本遠足の様子

〔A 日程　6月30日～7月2日〕

天候に恵まれ、予定通り実施できた。1日目に沼山峠を越えて大江湿原に下ると、晴れ渡る青空と多様な植生がきらきらと輝いて我々を迎えてくれた。思わず生徒も引率スタッフも次々と歓声をあげた。息をのむ美しさが眼前に広がり、生徒達からは、「最高！」「まるで天国のよう」「予想以上の景色！」といった感想が聞かれた。長蔵小屋には2日間にわたり大変お世話になった。本館と新館に分かれて宿泊。夜のミーティングでは旧宿泊棟を使用させて頂いた。

2日目、曇りの天候であったが予定通り登山コースは朝7時に出発した。途中でリタイアする者はなく、全員が燧ケ岳・俎嵓の頂に立つことができた。途中、雲が晴れる時間帯もあり、尾根から尾瀬ヶ原を見渡せる瞬間もあった。山頂付近は岩稜帯で傾斜も急であるため、2ブロックごとに、間隔をあけて登頂した。山頂付近での記念撮影と下山に時間がかかり、最後尾のＥブロックは山頂直下の尾根で30分ほど停滞することになってしまったことは反省である。また登頂直後には、雷雲の接近が予見され、樹林帯への下山を急いだ。雨に降られることなく、予定通り15時ごろ長蔵小屋に下山した。

散策コースは登山コースの出発を見送った後、尾瀬沼の南ルートから沼尻へ向かい、沼尻にて昼食、休憩。午後は尾瀬沼の北側コースを歩き長蔵小屋に戻った。途中沼尻からはミノブチ岳付近を登る登山コースメンバーが見え、交信。互いの存在を感じながら歩いた。

それぞれのコース共に帰着後は長蔵小屋向かいのビジターセンターの見学や、尾瀬沼湖畔や近辺のスケッチなど、それぞれにゆったりと過ごした。夜の礼拝では、リーダーより自然との共生について、また両コースの無事についての感謝が語られ、共に祈る時間を持った。また、長蔵小屋に勤務されている卒業生(D57 回生)中川謙吾さんから、尾瀬の自然や山小屋の仕事についてのお話を伺い、学園生活へのエールもいただいた。

最終日は朝、長蔵小屋を発ち、晴れ渡る大江湿原を歩き沼山峠に戻った。バスにて学園へ帰着。予定通り 3 日間を無事に過ごすことができた。

〔B 日程　7月10日～12日〕

1日目は午後の天候が崩れることが予想され雨雲の発達を確認しながら尾瀬に向かった。しかし、激しい落雷を伴う線状降水帯が会津地方～沼山峠付近で急激に発達。ちょうど御池に到着するころ落雷を伴うゲリラ豪雨となった。御池に到着したもののバスからの降車が危険を伴う状況であった。引率者のみ下車しガイドの平田さんとも相談の上、山行は危険と判断、生徒たちはバスから降りることなく学園に引き返す決断をした。同日19時半過ぎに学園に帰着し解散となった。1 学期間の準備を重ねた生徒たちは、この状況に驚きや落胆を感じたことは感想文からも十分に読み取れた。

以上のとおり、本遠足は両日程の結果が大きく異なる結果となった。

5.秋の尾瀬散策の実施

本遠足B日程が尾瀬ヶ原にたどり着くことなく終了してしまったため、9 月にB日程の希望者を募り 9 月 11 日・12 日の二日間、1泊2日で尾瀬散策を行うことにした。引率者及び長蔵小屋の宿泊可能人数の都合上、生徒 40 名を上限として参加者を募った。37 名の希望者と引率者4名で出発した。

初日は本遠足と同じ行程で長蔵小屋へ。翌日は尾瀬沼を一周し、昼過ぎに御池を出発、バスで帰校した。2日間とも小雨が降ることもあったが、秋の尾瀬の植生や鳥の観察を楽しみ、穏やかな時間を過ごすことができた。山の頂に立つことはなかったが、少人数であったため本遠足よりもゆとりがあり、尾瀬の自然と空気を満喫することができた。

6. 成果と学び

散策コースと登山コースを生徒自身が選び、複数のコースの遠足を実施するようになって 2 年。生徒たちの中には、登山コースがメインで、散策コースは「登山に行けない人のための付属的な位置づけ」という認識を持っている者が少なくなかった。それぞれが大自然の中に身を置き、何を成果とできるのか、遠足の目的への問いを生徒たちに投げかけ続けることに努めた。尾瀬のコースは初日と3日目は散策・登山両コースの生徒が同じコースを歩くことができ、夜も共に過ごすことができるため、自然に互いのコースを気にかけることができた。また、両コースのリーダーが対等に活躍することで高等部生徒全体への意識にも少なからず変化があったように思う。これは 25 年度の遠足の成果の一つであったとも言えよう。

遠足には、大自然の多くの生き物の息吹を感じ、その自然を造られた神との対話、また「自然と人」、「遠足と日常生活」の往還など、「山に登る」ことを通じて得られる学びがあり、それらをいかに生徒たちが掴み取っていくかが、本懐である。特に 25 年度は、リーダー学年を務めた高 3 の生徒たちが遠足を通じて作られた関係性を日常生活に落とし込み、自由学園での学びが深まることを目指そうと努めたことが最大の成果であったと思う。

6.展望と課題

25 年度は何よりも地球温暖化による気候変動を目の当たりにした遠足であった。また熊による被害が多発している現在、安全な遠足の実施のために求められることは増幅している。インバウンド、燃料費の高騰などで費用も以前より高額になっている。一方で、自由学園のカリキュラムや生活の変化もあり、現在の遠足を継続すべきか、またいかに継続すべきか検討を重ねる必要を感じている。安全な催行のために、教職員の知識と技術も求められる行事でもある。

今後、遠足の学びと目的について再度認識を確認し、実施時期や内容についても試行錯誤が必要な時期にきていることを実感する遠足であった。

遠足によって育まれる力が確かにあることは生徒達からも十分に感じられる。そして、自由学園での自治による日常生活の成果としてこの団体登山が実施可能となっていることも実感する。日常生活と遠足は表裏一体であることを自覚し、今後の教育活動、学校生活を重ねていきたい。



長蔵小屋の前で